

Ⅲ Howard A. Bern カリフォルニア大学バークレー校教授 (米国) のアポイントメント・プログラム招請について

農学部教授 長 澤 弘

1. 招請期間

昭和 61 年 5 月 21 日 (火) ～ 5 月 30 日 (金) 10 日間

2. バーン教授について

バーン教授はカリフォルニア大、バークレー校の動物学部および癌研究所において、内分泌学、とくにプロラクチンを中心とした比較内分泌、および性ホルモンと癌発生機序について、広範かつ精細な研究を行っており、すでに 300 以上の論文を国際誌に発表している。また同教授は、米国を含む世界の主要な関係学会誌の Editorial Boards に名を連ね、同学会および各種研究団体の委員会のメンバーとなっており、1973 年には米国 National Academy of Science の会員に推された。一方、教育者としても卓越した能力を持ち、世界各国の多くの逸材を養成しており、日本からもすでに 30 名以上の研究者を招へいしている。

3. 講演について

来日中、本学農学部において 2 回〔 5 月 26 日 (月) および 29 日 (木) 〕の講演を行なった。その内容は、「胎児期にうけた性ホルモンの、生殖器および乳腺におよぼす長期的影響」に関するものであったが、このテーマは、バーン教授と日本人研究者との共同研究の成果によるところきわめて大きく、わが国における講演としてまことにふさわしいものであった。

第 1 回目の講演では、妊娠中、とくにその初期に、流産防止の目的で、合成発情ホルモン (DES) の投与をうけた婦人から生まれた女子に、若齢期 (14～22 才) に、異常な高率で、膣や子宮頸部に腫瘍様病変の発生した欧米での事例を解説し、今後とも、DES 投与に限らず、性ホルモンの経胎盤的

影響による、同様の病変のおこる可能性を種々の理由をあげて指摘した。そして、このヒトにおける異常の発生する10年以上も前に、同様の病変のおこることがマウスで発見されており、この間における日本人研究者の貢献と、ヒトの実験系として、上記マウスの系が直ちに用いられるようになった経緯を説明し、適切な実験動物を用いての基礎研究の重要性を強調した。

第2回目の講演においては、*in vitro*での最近の新しい細胞培養の方法により、上記のような雌性生殖器官の異常発生におけるホルモンの作用機序について講演を行なった。

両講演とも、日本語による解説付の上、ユーモアを交えてのきわめて理解しやすい英語で行なわれ、かつスライドが十分に活用されたためもあったか、学生の質問がきわめて活発で、バーン教授を大いによろこばせた。また、上記講演の中で、その業績の紹介された日本人研究者も学外から多く来聴し、バーン教授との間にきわめて高度な研究討論の行なわれたことは、学生に強い印象と刺激を与えた。参加人員は、1、2回目それぞれ約50名、30名であった。

4. その他

2回目の講演終了後、岩本農学部長主催のレセプションが同会議室で開かれ、農学部の関係教員とも種々の情報交換を行なった。

また、5月30日(金)には、申請者(長澤)の研究室(家畜育種・実験動物研究室)において、大学院および学部学生の卒業実験について一題ごとに説明を受け、討議・指導を行なった。本研究室におけるこれら研究の多くが順次国際誌に発表されていることを、当然のことながら、高く評価し学生に学問の意義を改めて認識させた。

引き続き、家畜生理学研究室の加納康彦教授より、マストミスについて説明をうけ、その実験動物としての意義について、実物を前にして討議を行なった。

5. 招請の意義

以上今回のバーン教授の招請は、本学の関係教員および学生と十分な情報交換を行ない、得るところも、与えるところも多く、十分その目的を達したものである。

おわりに、今回バーン教授の招請のため御尽力頂いた国際交流センターおよび同事務室の関係各位に厚く御礼申し上げます。

（付記） なお、バーン教授は、上記日程の合間を利用して、東京大学理学部、東京大学海洋研究所をはじめ、都内および近辺の関係研究施設を精力的に訪ね、現在および将来の共同研究について討議し、論文作成の指導を行った。